

# 沖縄とは何か 私にとっての沖縄とその「独自性」

## 目次

### はじめに

#### 1. 支配の歴史を辿る

##### 1-1. 沖縄と八重山の境

##### 1-1-1. 八重山における勢力関係

##### 1-1-2. 琉球王府に組み込まれた八重山

##### 1-2. 薩摩の琉球支配

##### 1-2-1. 第一期支配 暗黙のうちに支配下へ置かれた王国

##### 1-2-2. 第二期支配 武力行使

### 小結

#### 2. 異国である事の必要性和自己意識

##### 2-1. 「琉球王国」としての認識

##### 2-1-1. 琉球王国と中国の関係

##### 2-1-2. 何故薩摩の中で王国が残されていたのか

##### 2-1-3. 琉球王国の変体 少しずつ変化していくもの

##### 2-2. 琉球から沖縄への移行の中で

##### 2-2-1. 琉球王国が瓦解するとき

##### 2-2-2. 瓦解する国家に生きる人々が置かれていた状況とは

### 小結

#### 3. 支配の中で変動していったものの背景を探る

##### 3-1. 現在まで残るオナリ神信仰の根底 支配によって生み出されたもの現

##### 3-1-1. 統制される前の祭祀の欠片？

##### 3-1-2. 「統制」によって一気にポピュラーになった「独自性」

##### 3-1-3. 現代に息づく「独自性」

##### 3-2. 支配の中で発展せざるをえなかった物とは何か

##### 3-2-1. 人々を苦しめた、「発展せざるをえなかった」背景とは

##### 3-2-2. 「独自性」を命がけで納めなければならなかった時代

##### 3-2-3. 命がけで神に祈らなければならなかった時代

##### 3-2-4. 現代に息づく「独自性」・2

### 小結

#### 4. 私にとっての「独自性」と沖縄、そして八重山

##### 4-1. 「独自性」について

##### 4-1-1. 何故沖縄の「独自性」は痛いのか

##### 4-1-2. 「私」の記憶と「独自性」

##### 4-2. 何故私は「独自性」が好きなのか

##### 4-2-1. 「私」に手繰り寄せる事を魅力と捉える

##### 4-2-2. 日常が魅力に変化するとき

## 考察

## 結論

## 註

## 文献目録

## はじめに

沖縄とは何であるか。そんな問いを、私は大学に入り、沖縄にまつわる様々な歴史を知るまで考えた事もなかった。だから何だと言われれば一言で説明するのは難しい。だが私はこれが本稿の根底であると考えているので、まずここに記しておく。

沖縄県とは、日本列島の南西端に位置する、弓なりになった 1200km に及ぶ島群の事を指す。県総面積の大部分は沖縄本島が占めており、県内に置かれた有人の島は 48。沖縄へ向かう機内でその地図を見て、微かにでも驚きを覚える人はどれ程いるだろうか。日本という国の中にあっても、沖縄という島々は本土からは結構遠い。むしろ大陸部 中国や台湾に近い位置にあるのだ。この位置を、改めて認識した事のある人は、意外に少ないのではないだろうか。沖縄は「日本列島」の南に位置する島群であり、薩摩に侵略され日本にとりこまれる前までは、独立した国家であった。そしてその国家が生まれる以前は、個々の島として固有の道を歩んでいた。有名だとばかり思い込んでいたが、実は「琉球」という名ばかりが一人歩きして、その歴史的背景はあまり知られていない。私は沖縄出身の母と東京出身の父の間に生まれた子供だ。沖縄をテーマに選んだのも、幼い頃から当り前のように傍にあった慣習が実は沖縄特有のものであると気づいた事や、母に「私らが子供の頃は、沖縄から東京に来るのにパスポートが必要だった」と語られた事を思い出したからだ。

11 月半ばに、祖父が危篤であるとの報を受け、急いで母の故郷である石垣島へ渡った。着いたその日には一時持ちなおしたものの、残念ながら祖父は亡くなってしまった。男としてとても恰好良い祖父であったので、親族の哀しみは相当なものであったが、彼は最期まで恰好良かったので、きちんと送ってあげなくてはと皆で葬儀の準備を始めた。問題はそこからだった。葬儀の仕方が違うようなのだ。地区によって。本島とも違う。同じ石垣島でも、北と南ではまた色々異なっているらしい。言うまでもないが、本土に住む私たち家族にとっては、石垣島の形式などさっぱり分からなかった。従兄弟の家では葬儀屋が一任して全てを行ってくれたようなのだが、営業所によって待遇が異なるらしく、「ご遺族様にお任せします」との事であった。古くは各地で葬儀の仕方が違った為の配慮だったのかもしれないが、親族は皆困った。曾祖父と曾祖母は母がまだ幼い時に亡くなっており、それ以来祖父の家での不幸はなかった。本島などとも形式が異なるようなので、誰もその形式を知らなかったのである。そんな中、指示を出したのは祖父の兄弟、そして友人だった。まず家の中の額縁すべてに、細長く切った白い紙を斜めに貼り付ける。鏡も同様。テレビもそのようにされた。これは死者の魂が額の中に宿ってしまうのを防ぐ為だという。そして次に出された指令は、「祖父が亡くなった病院の石を拾って来い」というものだった。各数は忘れてしまったが、表門と裏門の所にある砂利を、合計 46 個。これは亡くなった祖父の魂がまだ病院に残っているので、石に宿して家に帰すというものだった。数を間違え 36 個しか拾ってこなかった伯父は怒られ再び拾いに行かされた。そしてその間私はひたすら餅屋に電話をかけていた。餅がなければ葬儀が出来ないというのだ。しかも翌日までに 40 個の餅を。何に使うのかと思いきや、翌日納骨するお墓の前で、供えた餅を皆で食す為だった。また、本土と同様の祭儀もあった。恐らくこれらは風葬が主であった頃の葬儀形態が変容し、日本化した中での葬儀なのだろう。葬儀場で焼香をし、お坊さんにお経を読んでもらう。ここは同じだった。ちなみにお坊さんは浄土真宗だった。宗派にはあまり頓着しないらしい。そしてその後、火葬場で火葬し納骨を行う。沖縄のお墓は相当大きい。大別すると亀甲墓、破風型墓、家型の三種 に分けられるが(註 1)、墓室は総じて地面と同じかそれよりも上に位置し、地下に埋められる事はない。祖父の墓は家型だった。石で造られた扉を開け、中に骨を詰めた缶を安置する。そして白い花、金の花、赤い花(造花だ)などを扉の前に順に並べ、皆で線香をあげる。あげ終わると墓の横に、祖父の名が書かれた赤い旗が高々と掲げられ、皆で祖父の安息を祈るのだ。墓の横に大きな旗があがった時、私は改めて「独特の地」というものを実感した。幼い頃沖縄の墓を初めて見た時の心境と似ていた。「独自性」という物はどこの地にも必ずあるが、では沖縄・八重山の「独自性」とは一体どのようなものなのだろう。

私はこの問題を考えるにあたり、自分が沖縄についてあまりに物を知らなすぎた為、身近にあったものの歴史を辿る事から始めた。沖縄の欠片である「文化」と呼ばれるものを辿っていくと、それは沖縄の歴史に繋がっていった。沖縄は支配に次ぐ支配の歴史で成り立っている。だがそこから生み出されたものも沢山あり、またそれは、現在の沖縄に、確かに「文化」として根付いている。支配に重なる支配の歴史を追う中で、ふと私は、「支配の歴史が沖縄の歴史である。だからこそ、支配に次ぐ支配の中で、異国としての沖縄が現在まで残存する事になったのではないか」と思い至った。支配では必ず何か潰され、統一化、同一化を図られるのが常である。支配の中では差別が生まれ、圧制からは民族性や国民制が奪われ、思想や概念も変革させられる傾向にある。だが今、支配されてきた沖縄という島は、何故か特異な文化を持つ物として現在まで残っている。何故だろうか。私は支配に次ぐ支配で潰された物、そこから新たに生み出された物、そして

沖縄の歴史を辿る事で、支配と圧迫の歴史の中で沖縄が現在にも「沖縄」という文化を残し得た、その背景が見えてくるのではないだろうか考えた。そしてそれはそのまま、「沖縄」という存在に繋がっていくのではないだろうか、とも。

沖縄の歴史は支配の歴史である。だが今、「沖縄」という文化はまだ現存し、日本という国の中で特異なものと認識されている。「沖縄とは何か」という議論の際、そういった認識を非難する意見もある。過去、「日琉同祖論」が掲げられた時代には、沖縄は日本と同じ源流を持つものだとされていた。ポストコロニアリズムという観点から、「沖縄は植民地である」という意見もよく耳にする。祖父は本土の事を「日本」と呼んでいた。石垣島では沖縄本島の事を「沖縄」と呼んでいる。では、沖縄とは何だろうか。

それを踏まえ本稿では、「沖縄」への支配の歴史を辿り、その中で「沖縄」がどんな位置付けをされていたのかを分析し、その中からどんな物が生み出され、今に至っているかを探る。具体的にはまず 1 で、今で言う「琉球文化」が確立する頃の、「琉球王国」での支配体制がどのような構造を持っていたかという事を示す。1-1 では、同じだと認識されがちな「八重山」と「沖縄」が別の物であるという事を示し、1-2 ではその上から更に支配が重なる過程を辿る。次に 2 では、支配に次ぐ支配を受ける(=恐らくアイデンティティが揺らぐだろう構造だと私は考える)中で、「沖縄」という領域を人々はどうのよう確保していたのかを、同じく歴史を辿る事で確認する。そして 3 では主に人々が今に息づく「沖縄」をどのような環境下で生み出していったのかを、「沖縄のシャーマニズム」と「八重山の織物文化」という例をあげて探り、最後に「私」の視点から見た「沖縄、そして八重山が持つ独自性」とは何かという事を示す。

## 1. 支配の歴史を辿る

ではまず始めに、先に述べた「支配に次ぐ支配」がどのような構造であったのか、それを明確にする。沖縄本島で三山が中央集権国家となり、琉球王国が成立してから琉球王国が薩摩に取り込まれるまでの動きを、各支配体制に沿って追っていく。ここでは歴史を辿る資料として、沖縄の学校でも使われている『高等学校 琉球・沖縄史』を主な資料とさせて頂いた。また本稿では、沖縄についてほとんど知識のなかった「私」が辿った知識収集の道程に添って沖縄を旅して頂く為、沖縄について詳しい方は何を今更と思われるかもしれないが、ほぼゼロからのスタートとなる事をご了解頂きたい。

### 1-1. 沖縄と八重山の境

では前提として、「沖縄」と「八重山」の間に点線で境界線を入れてみたいと思う。冒頭で「石垣島の人は沖縄本島を沖縄と呼ぶ」という事に触れたが、「沖縄」と「八重山」は違う物だと私は認識しているのだ。実はここでいう「沖縄」とは、沖縄本島の事を指す。「八重山」はその中に入らない。それは何故か。「八重山」とは、沖縄県先島地方の、石垣市・竹富町・与那国町で構成される島嶼の総称である。「やいま」という事もある。八つの山という意味で、八つの山とは石垣、西表、小浜、竹富、新城、波照間、鳩間、そして黒島の事を指す。要するに各島の名前だ。これに宮古を加え、「宮古・八重山地方」と一般的に括られる事が多い。私は幼い頃、よく「母の田舎は沖縄です」、という表現を使っていたが、それは「沖縄県」という意味合いの話であって、実際は「沖縄県の八重山地方の石垣島」、なのだ。では何故、そんな私の中に八重山が沖縄と別物だという認識が生まれたのか。「八重山」という地名が存在していたから、だけではない。では何故か。「八重山」の歴史を追う事で、その謎を解いていきたい。

#### 1-1-1. 八重山における勢力関係

八重山ははじめから琉球王府の一部であったわけではない。はるか昔、そこがまだ王国の勢力圏に入りきらなかった頃、島々にはいわゆる「有力者」が台頭していた。14 世紀のはじめに、沖縄本島は勿論、八重山地方でも既に村落は形成され、農耕社会が成立していたと言われている。また 14 世紀中頃一部宮古等では豊見親(トゥクミヤ)と呼ばれる首長が現れ、武力で村落を支配するようになっていった(新城 2001)。では本島と離島はいつ関係を持ったのだろうか。そしてどのように関係を持ち、どのような力関係を生み出していったのだろうか。

まず宮古では、目黒盛(めぐもり)豊見親という首長が誕生していたが、後にそれに対抗して与那覇製頭(よなはせど)豊見親という首長が誕生した。目黒盛豊見親は力で宮古を統治していたが、後者の与那覇製頭豊見親は、首里に渡り察度に仕え、そこから 1390 年に宮古の首長に「任命された人物」である。要は首里に「認可」される事で力を確立させたという事だ。その為、自動的に宮古で与那覇製頭豊見親に関係のある一部が、王府に「服属」する事となる。その後宮古では目黒盛豊見親の子孫が与那覇製頭豊見親系の子孫に養育される事によって勢力が実質的に合一化され、1474 年、正式に尚円王から仲宗根豊見親として認められる事で、統一政権を確立した(新城 2001)。これは離島への本島からの影響力が、明確に形になった事を表している。また、宮古以外の有力勢力としては、石垣で台頭した、かの有名な遠弥計赤蜂(オヤ

ケアカハチ)と長田大翁主(ウナータウフシユ)があげられる。前者は石垣島の大浜地区を、後者は石垣地区を拠点としていたと言われている。しかし覇権を争っていたこれらの勢力は、琉球王府が中央集権化し大きな力を持つに従って、必然的に変化していく事となった。

#### 1-1-2. 琉球王府に組み込まれた八重山

ではこの八重山はどのように琉球へ組み込まれていったのだろうか。この頃琉球王府では、琉球王国の黄金時代を築いたと言われる尚真王が中央集権体制を確立しようと、本島の有力者たちを首里へ移住させており、八重山地方をも勢力圏に入れようと考えていた。また八重山地方でも、その勢力圏に入るか、独立を保つかで意見が二分化していた。長田大翁主、そして宮古の仲宗根豊見親は琉球王府に服属しようとし、遠弥計赤蜂は宮古・八重山を統一しようとしていたのだ。遠弥計赤蜂は島内の別の有力者へ強力を求めたが受け入れられず、最終的に王府側は遠弥計赤蜂を46の軍船と3000人の軍勢で破り、石垣をその勢力圏に押し入れた。その後与那国で有力者だった鬼虎(ウニトラ)を倒した王府側は支配体制を整え、各島々を勢力下へ入れる事に成功した。首里が八重山を手に入れたが理由としては、八重山諸島の「貿易地点としての利点」があげられると思うが、遠弥計赤蜂らが力をつけてきたのもまた、その貿易地点としての利点を活かし経済圏を成立させていったからだろう。ところで私は元々「遠弥計赤蜂=武将・英雄」のような図式を頭の中に描いていたのだが、王府の正史『琉陽』では、遠弥計赤蜂は逆賊として「乱」を起こしたとされ、戦前までそう認識されていたという。しかし再度歴史を紐解いてみると、当時の宮古・八重山の状況から、「乱」というよりは「討伐・侵略」という言葉が当てはまるようにも考えられる。遠弥計赤蜂が治めていた場所から見れば彼は英雄であり、逆に王府から見れば、「逆賊」という単語が一番使い易い呼称 蔑称であったのではないだろうか。元々の国から乱が起こったのではなく、支配をしようとする過程で抵抗が起きた、という方がふさわしいのではないだろうか。島内外で勢力が拮抗しているこの機会に八重山を制圧した琉球王府は、こうして八重山地方をその王国下へ組み込んだ。「元々あった島々を、王国の下へ敷く形で吸収した」とも言えるだろう。そしてこの体制は、後々まで大きく「八重山」に影響する事となる。冒頭で触れた、八重山の人々は沖繩本島を「沖繩」と呼ぶという根幹が、私の中に八重山が沖繩と別物だという認識が生まれた理由が、ここにある。

#### 1-2. 薩摩の琉球支配

「支配に次ぐ支配」と書いたからには、支配はこれだけでは終わらない。八重山を取り込んだ琉球の上に、更なる支配が重なっていく。では次に、繁栄した琉球王府が支配されていく様子を追っていこう。周知のとおり、今現在「琉球王国」というものはなく、「沖繩」という名で日本の1県になっている。琉球が八重山を取り込んだように、日本が琉球を取り込んだ歴史があるからだ。これを指して、よく「日本が琉球王国を支配した」、と言われるのだが、実際は日本というよりも、「九州地方の島津氏によって侵略された」。では、この王国は何故支配されたのか。どのような過程を辿って日本に、島津氏に支配されるようになったのだろうか。この支配は正に「侵略」と呼ぶべき行為だった。またこの侵略は一度期には行われず、まず豊臣秀吉の全国統一頃に一度目の支配行為が行われたと思われる。私は「第一支配」を精神的な支配行為、「第二支配」を実質的な支配行為だと認識している。何故そう認識するようになったのか。琉球が支配されていく過程を御覧頂きたい。

##### 1-2-1. 第一期支配 暗黙のうちに支配下へ置かれた王国

第一期は「暗黙の了解」という一言に尽きる。まずここで着目したいのは、第一期(完全な支配の兆候が見られる段階)で、独立国家であった筈の琉球が、既に当然の如く政治取引の材料として組み込まれているという事である。これを指し、「暗黙の了解」とした。例として、「亀井? 矩(かめいこれのり)が豊臣秀吉に対し、琉球の占領権を求め、豊臣がこれを承諾した事」などがあげられる。何故豊臣はまだ支配してもいない王国を、我が物のように扱っていたのか。このような扱いは、日本と交易を行っていた琉球王国に対し、間に位置する島津氏が、琉球貿易を独占しようという背景の元、商船の領海渡航の許可を申し入れる為の印判を発行させようとした事に端を発していた。貿易相手国であった島津氏がこうして「琉球王国独自の」交易に制限を加えるようになると、琉球王国は暗黙の内に「属国」として扱われるようになっていったようだ。豊臣が九州を支配下に置いた後、琉球も、当然のように入貢を求められる。これは国家として武力等を軽視されていたというだけでなく、「琉球は九州の下に在る」と認識されていた事も一因なのではないだろうか。この頃豊臣は朝鮮出兵をしようとしており、この軍事費を琉球にも負担させようとしていた。結果琉球は、協力しないのであれば奄美大島を割譲しとの脅しを受け、最終的には「この軍事費の半分を負担し、島津氏にその半分を負担させる事」で合意した。この時既に当時の力関係として、日本>島津>琉球という支配関係が暗黙の内に認知されるようになり、亀井が琉球に侵

攻しようとするのを島津氏が止めた件を契機として、琉球は島津氏の軍事指揮下に置かれるものと取り決められている。精神的に「支配」の関係を認知させている事から、これが第一期の琉球支配であると考えられる。

### 1-2-2. 第二期支配 武力行使

次に第二期の琉球支配は、徳川幕府が成立した頃と区分する。この当時、日本側の「属国」琉球に対する要求は、「日明貿易の復活、その斡旋」であった。しかし琉球はこれを拒否し、結果として、1609年に琉球侵攻という武力行使の断が下される事となった。それまでも、斡旋と服従を求める動きは何度かあったのだ。例えば1602年の、陸奥への琉球船漂着の際、国内に漂着した琉球船を送還させる事で恩義を売り、その礼の国書を求めたのである。しかし琉球王府は礼を述べる事をしなかった。何故か。国書と送る事は、その国の下に在る事を認める事に繋がりがねないからだ。しかしこれを受け、琉球を日本に「任されていた」島津氏は、結果として琉球侵攻に踏み切った。尚この背景には、当時島津氏の財政がと逼迫していた事と他藩の台頭により緊張状態に置かれていた事などがあり、島津氏はこの打開をはかる為、予てより希求していた大島を手に入れようとしたのではないかという見方が有力とされている(新城 2001)。逼迫した状況を受け島津氏は、この機に暗黙の支配を形にしたかっただけではないだろうか。こうして第二期の琉球支配により、武力併合という形で実質的に琉球王国は薩摩藩の下に位置付けられた。確かに「国」であったのに、王国は国としての対等な関係を保たれる事なく、暗黙の認識の中で支配されていったのだ。

### 小結

さて、1-1 では「八重山」と「沖縄」が元々は別であり、それを支配する事で国家の下に「八重山」が置かれるようになった事、1-2 ではそうしてできた王国が繁栄の後、更に日本の中の島津氏に支配されていった事を確認した。「沖縄の歴史を見る事は支配に次ぐ支配を見る事」、そうした認識が私の中で生まれた理由が、おわかり頂けたらどうか。ここで 1-1 と 1-2 の、ここまでの構造を整理していくと、「江戸幕府 > 薩摩 > 琉球 > 宮古・八重山地方」という支配体制が確立されている事がわかる。特に「薩摩 > 琉球」とされる階層においては、琉球は完全に併合されたわけではなく、「国内の異国」という奇妙な支配形態をとる事になっていた。薩摩藩は琉球を縛る 15 条の掟(註 2)を定めた上で、薩摩の下にそのまま王府を存続させたのだ。では、一体何故このようないびつな支配体制を取る事になったのか。そしてその支配体制に対する、「日本」「薩摩」「琉球」という政治的な組織の思惑はどのようなところにあったのだろうか。それを探るためにはまず、琉球王国がどのように成り立っていたか、どのような方法で「国家」を確立していたかを確認しなければならない。

## 2. 異国である事の必要性と自己意識

「国内に異国を残したままの支配」という不可思議な構造の中で、「王国」のアイデンティティは揺らがなかったのだろうか。私はそうは思わない。支配されれば恐らくは、今までの「自己」は排斥されるのが常だからだ。そもそも、「日本の中で沖縄がアメリカ占領下にあった時代」に母が「沖縄から東京に来るのにパスポートや予防接種が必要だった」と私に教えた時、幼かった私個人ですら「え、じゃあ私はハーフ？」と自分の位置付けに疑問を持った。一個人ですらこうなのだから、「王国」もそのアイデンティティを見失いかけたのではないだろうか。ではこの支配体制の中で、例えぎりぎりであっても「異国」であり得たのは何故か。元々ひとつの国であったものを統治するのは容易くない。元々「属国」として軽視していたから、「王国」であっても大した力ではないと判断したのだろうか。いや、逆だ。軽視していたのにどうして、わざわざ「王国」などという名目を残させたのだろうか。「どうして沖縄は支配されたにも関わらず、ひとつの王国として今に継ぐ様々な文化の欠片を残しているのだろうか」と問い掛けられた時、私の中に様々な考えが浮かんだ。「既に統治体制がまとまっているのだから、その一番上を支配してしまえばいいだけの事だったのではないか」、「王国というものを支配するからには、やはり何かしら元の体制を残したまま支配した方がやりやすかったのではないか」、「でも本当にそれだけだったのだろうか」。そのような疑問を抱きながら沖縄の歴史を辿っていくと、「琉球王国」という国の存在背景にあわせて、やはりそれだけではないのだという事がわかってきた。排斥が行われなかったわけではないが、潰すべきものを潰さずに残存させたのは、そこに何かしら利用価値があったからではないだろうか。そして存続が行われながらも全てが排斥されなかったかと言えば、当然答えは否という事になるだろう。ではどうして、琉球と言う王国をわざわざ残す意味があったのか。そこには国である「意味」が存在しているのではないか。琉球はその武力は確かに軽視されていたかもしれないが、国としての存在意義は、大変強固なものであったのだ。この章では引き続き歴史を辿り、「国内に異国を残したままの支配」を送る事における利害関係に着目し、琉球が「王国」である事の意味を確認して行く。

## 2-1. 「琉球王国としての認識」とは何か

琉球の歴史を辿る中で、ひとつわかった事がある。「琉球」という国家のアイデンティティに大きな影響を与えたのは、中国であるという事だ。そもそも「琉球王国」とは中国により「王国」として認められる事によって成り立っていた国家であると考えられるのだ。では、何故そのような事が言えるのか。その認識をご理解頂く為に、歴史を追っていこう。

### 2-1-1. 琉球王国と中国の関係

歴史が前に戻るが、1314年頃、つまり沖縄本島がまだ統一されていなかった頃。島の勢力が北、中央、南の三つに分



かれ、所謂三山時代と呼ばれる頃には、力をつけた 本土で言えば恐らく「豪族」にあたるだろう各地の有力者は「按司(あじ)」と呼ばれ、自分の拠点に左の写真のようなグスク(註3)と呼ばれるものを造り、それぞれの地域で覇権を争っていた。グスクは城、つまり居住区兼軍事施設(祭祀を行う場を含む)だと考えられており、写真のように高い石垣によって周囲を囲まれている(ちなみにこの写真は沖縄本島北部の今帰仁城跡であり、この石垣の向こうは断崖絶壁であった。城郭と表現するにふさわしい造りになっている)。このように大きな城塞が姿を現し、個々の勢力圏が確立する中、一番始めに中国に対し朝貢を行ったのは中山の察度であった。彼は明からの使者に朝貢をすすめられ、

これを受けて一段早く冊封体制を築き上げた。これにより一時中山が大きな権力を持ったかのように思えたが、今帰仁を拠点とする北山、また島尻大里を拠点とする南山もこぞって明に朝貢を申し入れ、これを明が受け入れた為、本島の三大勢力が皆均等に中国の後ろ盾を得る事となった。ここで、中国から「国」と認められる国家が三つ誕生する。また、この段階で、「国」と認められる為には中国と朝貢を行うという「冊封体制」が琉球に成立した。この後、佐敷というグスクの首長をつとめていた思紹の息子尚巴志が、当時察度の後を継いでいた武寧を滅ぼし、中山を自分のものにす。そして尚巴志は「世子」と名乗って中国から「王」として認可され、後に北山と南山を制圧して、沖縄本島を統一する事に成功したのである。またこの後、今度は1471年にクーデターが起こり外交官である金丸が尚円という名で王位につく。そして中国は官栄を遣わし、尚円を国王に封じたのである。

この流れの中でとても興味深いと感じたのは、「世子」という単語。この単語に関して、高良倉吉はこのような記述をしている。

山南の配下にあった佐敷按司思紹は、佐敷上グスクを拠点とする小さな首長にすぎなかったが、その息子尚巴志はたぐいまれな英傑であつたらしい。父子協力して勢力をたくわえた後、一四 六年に浦添グスクを攻め、察度亡き後に中山王となっていた武寧を滅ぼして思紹が中山王となった。『明実録』によると、思紹は琉球国中山王武寧の「世子」(世嗣)の名で使者を送り、「父」武寧の死去を告げ冊封を要請している。武力篡奪ではぐあいが悪いから、「世子」として「父」のあとを継いだかのような体裁をとったのだ(高良 1993:48)。

ちなみに、この後彼らの建てた第一尚氏王朝が金丸によって倒された時も、尚円は「世子」の肩書きで使者を送り、「父」が亡くなったという報告と共に冊封を求めたという(高良 1993)。覇権を争う、沖縄で言うところの「戦国時代」でありながら、己の力で王座を奪った事を誇示するのではなく、方法を変えて体裁を取り繕うのだ。「中国」という国を、どれだけ意識しているのかが伺える。それもその筈、覇権をとった実力者は「琉球の王」というアイデンティティを中国に「申請」し、「冊封使」を遣わしてもらって王になる。つまり「琉球王国」は冊封によって成り立っており、更に言えば中国の認可は王にとって最大の力であって、それがなければ「王国」が成り立たないとも言える国家成立の最大要因であった と考えられるのではないだろうか。琉球王国と中国は密接に関わっている。その為琉球と宮古・八重山地方は、この後もこの根本的な立ち位置 「琉球王国のアイデンティティ」というものに左右される事となる。

### 2-1-2. 何故薩摩の中で王国が残されていたのか

さて、琉球王国がどのように成り立っているかを確認したところで、先程の問いに戻りたいと思う。では琉球王国は薩摩に侵略されながらも、何故しばらく王国としての形を保っていたのだろうか。ひとつの国家を制圧したにも関わらず、「国の中に異国がある」、もっと細かく言うなら「国の中の藩に異国がある」という不可思議な状態を作り上げたのは何故だったのだろうか。その要因として考えられるのは、次の3点である。

薩摩の背後に將軍家(徳川幕府)という大きな存在があった。

琉球は王国であり、その体制が既に確固たるものになっていた。

日本と中国の貿易が、成立しなかった。

上の二つを足すと、結果的に最大の理由だと思われる に繋がる。先にも述べたが、元々幕府の目的は中国との貿易であった。しかしそれは実際の所、達成されなかったのだ。中国側は日本と中国の講和交渉を求める遣いに対し、「尚寧が捕虜の身を解かれ琉球に帰国すれば、琉球の進貢を許可する」という旨の返答をした。そこで尚寧は国へ帰されたが、先に述べた掟 15 条が制定され、琉球の外交権は島津に管理されるものとされた。島津氏は琉球の外交権を管理する事で影響力を強めようとしたのだらうが、これは逆効果だった。中国側はあくまで「日本との交易」を受けつけなかったのだ。結果として、幕府は目的を果たせず、幕府の下にある薩摩は琉球を「異国」としてそのまま藩の下に残さなければならなくなった。これは琉球が王国として成立させていた体制が、そのアイデンティティが幕府にとって大きな意味を持っていたからではないだろうか。

「異国」として琉球を扱うのには、それ以外にもメリットがあったようだ。幕府にとっては「一国家を従えている」という権力誇示、島津氏は幕藩体制の中で自藩の権力を強める事が出来、琉球は琉球で、支配されながらもアイデンティティを残存させる事が出来る。また、当時琉球は王の代替わりと將軍の代替わりの度に江戸へ使節団を送る服属儀礼を行っており、それは「島津氏に引き連れられた異国の使節団」としての特色を顕著に表したものであった。これは「異国」としての琉球をアピールする催しとして、幕府にとっても薩摩にとっても、また琉球にとっても重要な意味を持っていたといえるだろう。琉球が「独自性」を持つ、その事を大々的にアピールしなければならなかったのだ。だがこのアイデンティティを守る為のデモンストレーションが、結果的に国家の財政を一番苦しめる事になる。

#### 2-1-3. 琉球王国の変体 少しずつ変化していくもの

では、「異国」である琉球は、その「独自性」がそのまま維持されていたのだろうか。決してそうではなかった。王国としての意味は残さねばならなかったが、国民意識を改革し、薩摩の下に従属させる必要性があったのである。これを行ったのが羽地朝秀(はねぢちょうしゅう)だ。羽地の改革として有名な「羽地仕置」は、以下のような改革であった。

質素儉約

風紀肅清

古い伝統行事の改め :ユタ(註 4)の取り締まり・久高島参詣を遥拝形式に・女官祭事を遠ざける

役人の不正取締り、農村活性化

諸芸の奨励

王国としての主体を失ったひとつの「国家」の中で、この改革は大きな意味を持っていた。これは次の章で登場する「日琉同祖論」の根幹とも言うべき「ヤマトとの融和政策」であるのだが、だからといって琉球王国の特質性を全て飲み込んでしまうものではなかった。何故ならそこには、「異国性」を保つという重要事項が介在していたからである。国家のアイデンティティを守る為に困窮した財政を、「ヤマトと融和させる」政策の中で立てなおす事で、また国家のアイデンティティを守る事へ繋げていく。このような政策の中で琉球は、ただ「ヤマト」へ変換されるのではなく、「異国」という枠組みの中で「別体制での琉球」へ変革する事になったのだと考えられる。こうして形を変えた「琉球」は、薩摩に、ひいては日本に還元する為に、貿易・納税をし続けた。むしろ、その為だけに存在していたと言っても過言ではない。琉球内部に居た人々にとっては冗談じゃない、と言いたくなるような話だろう。だが「琉球」が国ではなく、国の下の国として存続する事になった時点で、「琉球」は「貢物をする国家」から、「貢物をする為の国家」に変わってしまったのではないだろうか。琉球が、そして沖縄が、ただの 1 県でありながら何故か「植民地」だとして認識される、その長い長い歴史は、この頃から始まっているのだ。

#### 2-2. 琉球から沖縄への移行の中で

江戸幕府がどのように琉球を位置付けたかには上で触れたが、では近代、「琉球が沖縄になった時」にはどのような位置付けがされていたのだろうか。今琉球は琉球ではない。「沖縄」という県になっている。ではそれはどのような過程を辿ったのだろうか。

##### 2-2-1. 琉球王国が瓦解するとき

江戸幕府が「日本」になる時、琉球はまだ異国のままであった。最後の王尚泰が即位する頃の事である。1872 年、明治政府により「琉球」が召喚され、「琉球藩」になる。そこで尚泰は藩王とされた。この背景には中国の存在がまだ根強くあ



ったものと思われ、琉球を「藩」としたのは、国内外からの抗議を予想し、王国をそのまま県へ移行させるのは困難であるとの判断から、一度「藩」としてとり込んだ後に、県への移行を断行しようとした意図があるとみられている(新城 2001)。そして、そのような状況の中、「琉球人台湾遭難事件」が起こる。これは台湾に遭難した宮古船の乗組員 54 人が殺害されたという事件で、日本国はこの責任を清国に問いただした。しかし清国は台湾を未開の地だとして取り合わず、日本はこれに対し武力行使に出て、結果清国側に「この武力行使は日本国属民を殺した台湾人への正当な行為であった」と認めさせる条文を交わさせた。これにはどういう意味があったのか。日本国属民イコール琉球人だ。つまりここで、長い間成立していた中国からの「王国」としての認識が強制的に崩され、琉球のアイデンティティの根幹が瓦解していったのである。日本政府は琉球に、以下のような命令を下し、琉球を本格的に日本の領土内におさめようと考えた。

- ・ 清国との朝貢関係の廃止、中国との関係断絶
- ・ 新制度や学問を研究させるための若手官吏の派遣
- ・ 藩の政治制度を日本の府県制度にならってあらためる
- ・ 軍事施設整備

これらの命令は当然容易く受け入れられるものではなく、特に「清国との冊封、朝貢関係の廃止、中国との関係断絶」は根本的な王国としての成立条件を断ち切る事でもあった。しかし政府はそのような琉球側の言い分は聞き入れず、ついに武力行使で廃藩置県を断行した。清は抗議し日本と交渉を行い、「分頭・増約案(註5)」に一時は合意したものの、結局論印はなされず、沖縄、宮古・八重山は日本の領土に置かれる事となった。この頃既に国ではなく、完全に「領土」として扱われていたこの島々は、この後「日本への同化」が行われていく中で再び「同化しきらない微妙な位置」に立たされる事になり、特に沖縄の下にある宮古・八重山は、支配に次ぐ支配の中で翻弄されていく事になる。

#### 2-2-2. 瓦解する国家に生きる人々が置かれていた状況とは

「国」というまとまりがどのような道を辿り、どのような思惑でたらい回しにされてきたかについてはここまで述べた。では、そこに住む人々は一体どうだったのだろうか。翻弄され続ける大波の中で、人々はどうのように考え、どのように暮らしていったのだろうか。日本に対する住民の抵抗がなかったわけでは当然ないだろう。しかし日清戦争終結に伴い、人々の考え方は徐々に変化していった。いや、せざるをえなかったのかもしれない。その「同化」に深く関係するのが、先にも述べた「日琉同祖論」である。沖縄とは何かという認識を巡って、過去様々な論議が繰り広げられた。沖縄について論じた先駆的研究者といえば、まず伊波普猷、そして柳田国男や折口信夫などがあげられる。伊波普猷によって 1911 年に『古琉球』が著されてから、沖縄のアイデンティティは議論されるべきものとして広く認知されるようになった。そして彼により、日本と琉球を深く結び付ける「日琉同祖論」が発表された。これは沖縄と日本の祖が同じであるという事が基盤となっており、沖縄の言語も元を辿れば日本と同じ系統に属しているという理論でもあった。王統の始めとされている舜天王が源為朝の子供であるとする伝説や、「中山世鑑」から稲の伝来により民族が流れてきたとする説などを引用し展開されたこの議論は、後の「起源論争」にも繋がっていく。彼だけでなく、明治以降 この時代の研究者には、琉球に日本の祖を結び付ける傾向があったのだという。この事に関して、以下のような記述がある。

明治以降の外来の研究者の視点は、多くの場合、八重山(広くは沖縄)に「古代日本の鏡」を見だし、日本との関連で捉える傾向が強かった。いわゆる「日琉同祖論」である。「古代日本の鏡」という側面は否定できないにしても、それはややもすると琉球を日本の「版図」とする明治政府以降のナショナリズムと結びつく(あるいは利用される)恐れも否定できなかった。一方、沖縄側も明治以降の沖縄差別の中で、日本国民としての正統性を主張するための論拠として主張されてきたりした。「日琉同祖論」は、このように学問研究であると同時に、常にイデオロギー的要素がつきまとってきたのである(三木 2003:9-10)。

この背景にあるものとして重要なのは、文中にもあるように、当時西洋的な近代化を推し進めていた日本国内で、「異質」とであるとされたアイヌ・朝鮮・台湾人と、そして琉球人に対する蔑視が広く蔓延していた事だろう。日本語ではない、しかし彼らにとっては日常で話していた言葉を、ぼろりと口にただけで何故か殺されてしまう時代が、過去確かにあったのである。また、こうした学者達の動きは確かに「皇民化」への土壌を作り出しはしたが、しかしだからこそ、完全なる「皇民化」には至らず、半分日本だと主張する事で、差別意識の濃い時代に日本の中にある異国という位置付けを僅かながら主張し、自らの独自性を全て捨てずに済んだとも考えられる。人々は「自己」を保つために「自己」を抑え、その一方で「自己=特異性」という面を変化させる事で、意識的にしる無意識的にしる「利用」してきた、せざるをえなかった、という側面がここに表れているように思う。このような「半同化」の考えが「定説」として認知されていた事に対しては、近年大幅



な見直しがされている。確かに、誤った常識は覆されてしかるべきだろう。だが、この時代の背景を考えると、その思想が生み出される過程を、作っていた何かがあったのではないかと思えてくる。決して全てを肯定しているわけではない。だが、独自性を誇る事でその身が命が危うくなってしまう時代において、その独自性を安全な方向へ同化させる事以外にどう理不尽な暴力を回避できる術があっただろうか。このような「独自性」の変化の裏には、翻弄され続ける「被支配」の側の苦しみ、確かに存在しているように思えてならない。

### 小結

2-1 では琉球王国のアイデンティティが中国によって支えられ、その為に琉球が支配されていく中で「独自性」を保つために王国として存在していった事を確認し、そのような支配体制の中では「独自性」は決して元の形のまま存在していたわけではないという事を確認した。2-2 では、アイデンティティが崩壊し、琉球が「沖縄」になっていく過程と、その中で生きる人々が、どのような状況の下で生きていたかを確認した。このように過去、琉球はその「独自性」を半ば作弄的に変化させ、「国家として利用」する事で、しなければならない状況で成立していた事もあった。そしてこのような体制下では、その中で生きる人々も翻弄されていたのではないかという事を、改めて示した。冒頭の問いを、ここでまた呟いてみる。「独自性」とは何だろう。「独自性」は国家を成り立たせる理由になり、また状況によって人々の命を左右する、危険な要因にも成り得るのだ。

### 3. 支配の中で変動していったものの背景を探る

では、重なる支配体制の中では、圧されるだけ、歪められていくだけで何も生み出されはしなかったのだろうか。そんな事はない。今現在沖縄に受け継がれている「独自性」の中に、支配の中で生み出されたものが沢山息づいている。そしてそれは、やはり支配と密接に関わって来ている。また、先にも述べたように支配の中では、やはり「独自性」も変化している。決して元の形である事を、奨励されてはいないのだ。ではこのような支配構造の中では一体何が生み出され、どのように変化していったのだろうか。そしてしばしば作弄的に変化していく彼地の「独自性」は、そこで生きていた人々は、一体どのような環境下にあったのだろうか。その環境下で生きた人々が生み出したものとは、一体何なのだろうか。「琉球・沖縄」という括りで一文化とされがちであるが、文化はそもそも流動的なものであって、変容していく事が当然の成り行きでもある。失われる物もあれば、生み出される物も合体する物もある。支配によって生み出されたものもあるだろう。その支配の中で生み出さなければならなかったものもあるだろう。その流れを、この章ではいくつかの例をあげて確認していきたい。

まず、制圧され、「王国」になった琉球では、何が生み出され、何が失われたのか。現在の沖縄料理の礎ともなっている宮廷料理や、中国の使節を迎える儀礼で踊られた舞など、現在もその姿を色濃く残す、この時代に「生み出された」文化は沢山ある。しかし数をあげればきりがないので、例としてその中でも特に「琉球王国」の根幹ともなった「神女」による祭祀組織を、主に吉成直樹の『琉球民俗の底流』と高良倉吉の『琉球王国』を元にしながら探る。そしてその次に、薩摩支配下における琉球王国内で行われた税制を元に、過酷な時代の中で人々が必要としていた物、その中で発展せざるをえなかった「独自性」を取り上げていく。

#### 3-1. 現在まで残るオナリ神信仰の根底 支配によって生み出されたもの

女の人は霊力を持っている。幼い頃、母に教えられたそれを「そういうもの」だとして受けとめていた。それが沖縄独特の信仰形態をとっている事に、随分長く気がつかずにいた。沖縄のシャーマニズムは、ユタ・ノロといった女性神役による霊力(セチ)信仰が主体となっていると言われ、また沖縄はオナリ神信仰の主体地であるとも言われている。オナリ神信仰とは、姉妹(オナリ)が霊的な力によって兄弟(エケリ)を守護するという信仰の事である。要は、神懸りの力は姉妹に宿るとされる思想であり、これは各地の祭祀の中に組み込まれてきた。儀礼としては、主に収穫、祈念や厄年を払う儀礼にこの信仰が見られる。沖縄だけではなく各地に巫女的な存在は沢山いると思うが、沖縄のそれは他の地域よりも徹底されており、言葉で表すのは難しいのだが、やはり「独特」なのだ。その特異性からか、「女性が霊力を持つ」というこの信仰形態は沖縄の特色としても有名になりつつあり、近年映画などで「沖縄」を描き出す際にこうした信仰を描く事も多くなってきている。沖縄と言えば神女信仰、私も幼い頃からそれが「昔から続いている当り前のもの」だと思っていたが、実際の所、男性が中心になって行われる祭祀も、少ないが存在するのである。では、これはどのような可能性を秘めているのだろうか。

### 3-1-1. 統制される前の祭祀の欠片？

琉球王府の神女集団　ひいては王の権威を裏付ける為の島が、久高島だ。この島は琉球の始祖アマミキヨが降臨した地とされ、「神の島」と呼ばれている。2-1でも少し触れたが、琉球王国時代、首里王府では南東端の斎場御嶽から久高島へ参詣を行う事が大切な儀礼となっていた。神が降り立つといわれる御嶽の中でも特に重要な聖地があるこの島には、やはりノロを中心とする神女組織が存在する。しかし同時に、上記の「男性階梯集団」もまた、存在していたのである。ソールイガナシーというこの集団は、「棹を取るもの」という意味で、主に成年男子によって形成される階梯集団だ。そして、龍宮神を司る神役でもある。十六歳から七十歳までの成年で形成されたこの集団は、海人である久高の男性の頂点に位置し、村頭を経験した男性が二人ずつ、必ず二年つとめる。ソールイガナシーはノロを頂点とした女性中心の祭祀組織とは別の次元に位置し、主に漁業に関する祭祀を担当してきた。三月に行われるピクシミという儀礼では、棹とサシカと網をサバニに乗せ、森から神をお迎えし、北端の岩礁までお連れして、その場で一本釣りをを行うという。

また、男性中心の儀礼といえばアカマタ・クロマタがあり、これは木のつるを身にまとった、鬼のような仮面をかぶった神が山の中、洞穴の中からやってきて、村人の歌にあわせて踊りだすというものである。はじめは一体、そのうちにもう一体の神が現れ、村人を踊りで祝福する。この来訪神を見送ると歌が終わり、村人は次の場所へ移動しては、また歌で神様を呼ぶ。同様な祭に、沖縄諸島北部のシヌグという祭がある。これは兄弟ないし男の祭という意味があり、男達为中心となる祭である。山の神に農作物の豊作、集落、家族の繁栄をまず祈り、次の海に向かって同様の祈りをささげる。男達は草木を身にまとい、神に扮して村を浄めるために山を下りてくる。シヌグに対する祭にはウンジャミというものがあり、こちらは女性中心の祭だ。このふたつの関係について、小野重朗はこう記している。

国頭では古くから照葉樹山地を舞台にシヌグの祭が行われてきた。シヌグは国頭から奄美にかけての土着の祭であり、北山王の下での祭であった。中山王による三山統一の後、第二尚王朝三代の尚真王の時代を迎えて、聞得大君を頂点とするノロ神女制度が確立されるとともに、王朝文化を支える海洋性平地文化は大きく進展する。国頭の地にもそれぞれの集落にノロ制度の祭祀組織が整えられたが、ウンジャミはその神女制度が国頭へ持ち伝えられた祭ではなかった。国頭に土着した照葉樹山地文化と、首里からノロ神女制度がもたらした海洋性平地文化との対立抗争がおこった結果としてウンジャミが国頭の地で作られた(小野 1993:30)。

こうした男性中心儀礼の中で注目したいのが、男性神役の位置である。彼等は決して「神女」の下に置かれる立場にはなく、久高島においても、ノロに頭を下げるなどという事はないという。儀礼の中で「男神役」と「女神役」が対等の位置関係にあり、また男中心の祭と女中心の祭が対抗関係に成立していることについて、吉成直樹は以下のように述べている。

女性の霊的優位あるいはオナリ神信仰が基礎にあるならば、琉球列島に広く見られるような、女性(姉妹)が男性(兄弟)を守護するという形式の祭りになるはずであり、シヌグのような男性のみの祭りは成立しなかったと考えるのが自然である。男性主体の祭りと女性主体の祭りという対になり、対抗関係に祭りが存在すること自体、オナリ神信仰がそれらの祭りが成立する以前には存在せず、関与していないことを示している。いま一つ重要な点は、男性主体の祭りが女性主体の祭りに先行して形成されたということである(吉成 2003:173)。

これまでの議論をまとめると、つまり「現在古くから伝わっているとされる女性中心祭祀主義は、実はそんなに古くないのではないか」という疑問が提示される。だがここで、私は女系祭祀と男系祭祀の関係について掘り下げたいわけではない。このような論が展開される根底にあるものが何なのかのポイントなのだ。このような論の根底には、琉球王府の「神女組織形成」の過程が深く関係していると思われる。琉球王府の祭祀のメインは神女組織である。神女組織の頂点に置かれたのは「聞得大君」と呼ばれる神女の最高峰で、王国の祭祀は全てこの神女に一任されていた。尚真王の時代に確固たるものとして成立したこの神女組織は、「女=祭祀」「王(男)=政治」という二本の柱を打ちたて、それは王国内の各島々の信仰をも統制するものになっていったのである。

### 3-1-2. 「統制」によって一気にポピュラーになった「独自性」

では、具体的にはどのような統制方法をとっていたのだろうか。神女だけでなく、これは各地方へ配属される者にも言える事だが、琉球王府の人事配属は「辞令書」によって行われていたとされている。発見されている辞令書は202点、最古のものは1523年。尚真王の治世である。辞令書はこの代から最後の王尚泰の治世である1874年までのものがある。辞令書を発見した高良倉吉は、ある辞令書を例として、これを3タイプに分けた。以下は『琉球王国』からの引用である。

第一のタイプは、Aの辞令書のように、全体に平仮名で書かれ、しかも例外なしに「しよりよりまかとうが方へまいる」のような指示文句をもつもの。第二のタイプは、Bの辞令書のように、「しよりよりまかとうが方へまいる」が欠落す

るもので、全体的な傾向としては時代が下るにしたがって平仮名の表記から漢字の表記へと変化するもの。第三のタイプは、全文漢字で書かれたものである(高良 1993:129)。

「しよりよりまかとうが方へまいる」という文句はマカトウという女をノロ職へ任命する為の文句であるが、訳すと「首里(王)よりマカトウにくだされる」という意味になる。ちなみに A は初期の辞令書、B タイプは島津侵入以後、C タイプは 1667 年から琉球処分までという時代区分になっているという。そもそも、私の中でノロという職はひとつもしくは複数の島の祭祀を担う存在であり、神がかり的な要素から神女になる、世襲制という認識が強かった。しかしそうではなかった。尚真王時代に神女制度が確立して以後、ノロという公的神女役は王によって任命され、しかも給与として「50 ヌキ」の面積の畑地を与えられていたのである。これは地方に配属される官人と同じ処遇であった。つまり、神がかり的な人選である筈の神女組織も、官人と同様に地方統制のための制度として活用されていたという事だ。そもそも神女を王が任命している時点で、王国内の力関係が明確になっている。聞得大君というトップの神女が、王によって任命されている事からも、王は祭祀の中に強く関与していたのではないだろうか。このような祭祀の統一化を王が行った背景には、今あげたように地方統制のためという点と、王国としてのアイデンティティ確立という点があげられよう。歌謡「おもろさうし」の中で王が太陽=神として謡われるようになっていったように、王は民衆にとって絶対的存在であらねばならず、それには祭祀と政治の分断、そして神女すら任命する者という絶対的な位置付けが必要であったからだ。男性中心の神役信仰が、過去成立していたのか、本当に女性中心儀礼が主流だったのかは定かではない。だが琉球王府が統一される以前、女性の首領がいなかったわけではない。1500 年頃与那国を支配していた女酋長、サンアイ・イソバがそれである。イソバには 4 人の男兄弟があり、その兄弟を与那国島の各地に配置して島を治めていた。女傑として名高い彼女は土地の開墾、武装の整備等、指導者としての労をおしまなかったと伝えられている。女性が「祭祀」の中へ位置付けられる以前は、女性も島を統治する事が出来ていたのである。

これらの点を総合すると、今現在当り前のようにになっている「女性=神女」という定義が、実は支配の中で作り上げられたものではないかという疑問が浮上する。いいかえれば、「作り上げられた信仰形態が、今現在土着の信仰として認識されているのではないか」という意見になる。男系祭祀が塗り返られて女系祭祀になったのではという疑問も、証明はできないが頭の中に置いておいて、まずは「女系祭祀を統制していた」支配体制があった事に着目して頂きたい。少なくとも、王によって「任命」される組織形態が確立し、「神女」という仕事成り立っている事から、当時の女性系神役組織が王府によって動かされていた事は明白だろう。政治の中で意図的に組織された信仰形態は、沖縄シャーマニズムの根幹を作り出している。

### 3-1-3. 現代に息づく「独自性」

女性の霊力信仰、「ノロ」、「ユタ」といった単語は、現在の沖縄にも確かに存在している。「ノロ」「ユタ」についての捉え方は人により様々であるが、具合が悪くなった時等、医者にかかりながらもユタの呪いを頼る人は、現在も少なくない。どんな時にユタにかかるかというところも場合々々で、熱がさがらない、または何処かで魂を落としてきた(註 6)、という身体に不調をきたした場合の他、家を建てたり結婚をしたりという節目、または単純に悩み事がある時などに、「占い」をしてもらいにユタの元を訪れる事もある。近年ではこうした信仰は、「沖縄」を描いた映画、本の中で様々な形に抽出されている。有名などころでは、映画『ナビの恋(中江祐司 1999)』などに「ユタ」が登場しており、沖縄のシャーマニズムを土着のものとして描写すると同時に、生活の中に息づく思想、信仰としての根強さを物語っている。

### 3-2. 支配の中で発展せざるをえなかった物とは何か

「支配の中で発展せざるをえなかった物とは何か」。3-2 をこのようなタイトルにしたのは、取り上げたいものがあつたからに他ならない。きっかけは何でもない事だったが、私はふと、沖縄でよく見る土産物の織物が、島によって様々な特色を帯びている事に気がついた。具体的にはどのような特色があるのか、それまで知ってはいても特に意識していなかったそれら織物の事を調べていくと、そこにはまたしても「支配体制」が深く関係していたのだ。では、何故このようなタイトルを 3-2 につけたのか。それを探るにはまず、沖縄・八重山の時代背景を確認しなくてはならない。

#### 3-2-1. 人々を苦しめた、「発展せざるをえなかった」背景とは

島津氏が琉球を支配下に置いた後の事だ。各島々では、所謂検地が行われた。薩摩への貢納高を定める為だ。1-2 で見たように、ここでの支配体系は「江戸幕府>薩摩>琉球>宮古・八重山地方」となっており、薩摩から納付を申しつけられた琉球には、それを回避する術がなかった。1611 年、琉球王府に課せられた島津への貢納は年貢米が 8000 石余、芭蕉

布が 3000 反、上布が 6000 反、下布が 10000 反、牛皮が 200 枚というものであった。これにより琉球王府は課税方法を改め、強化する必要に迫られる。そこで行われたのが、悪名高き人頭税である。

人頭税は 1637 年に施行された税だといわれている(註 7)。人頭税の課税方法とは 15 歳から 50 歳までの男女一人ひとりに、田畑の面積とはかかわりなく、頭割りに税を課す仕組みである。税には米や布、そして島々の特産物が定められており、その島で例えば米が取れなくともお構いなしであった。例えば新高島は粟や大麦はとれるが米はなく、その為課税された米を納める為には西表島へと赴き、そこで稲の出づくりをしなければならなかった。この事について、『八重山研究の歴史』の中に、以下のような記述がある。

一四四七年二月、朝鮮濟州島の船が嵐にあつて難破。三人の朝鮮人が与那国の獵師に救助され、約半年間の滞在を終え、西表、波照間、新城、黒島、多良間、宮古、那覇を経て送り返された。その体験記は後に『李朝実録』の中に詳しく記載されることになるが、その中で新城島は「捕刺伊」(パナリ)として記されている。

「其地平行にして山なく、周囲二日程ばかり。人家わずかに四十余」と記され、その他、島の人たちは、青い珠を腕輪や足の輪などにしていると、黍、粟、大豆はあるが稲はなく、稲は祖納(西表島)まで行って買ってくる……などの生活がわずかながら記録されている。

山のないパナリには、昔から田んぼはなく、農耕はもっぱら黍や粟などが中心であった。それも昔は焼畑式の農耕であった。八重山では古くから島々を野国島、田国島と二つに分けていわれるが、山のある石垣島や西表島が田国島で、隆起サンゴ礁からなるその他の島々は野国島である。

新城島が西表島に稲の出づくりをするようになったのは、近世以降のことである。おそらく人頭税制が敷かれてからであろう。一六三七年に制度化された人頭税は、十五歳から五十歳までの男女一人一人に税を課すというものであったが、その税は重く農民を苦しめた。とりわけ、米の取れぬ土地に対しても貢物を課したこの税制は、新城島の人たちに海を渡って西表島に米をつくりに行くことを余儀なくさせたのであった(三木 2003:178-179)。

人頭税が過酷な税であったという事を伝える為の伝承・伝説はいくつも残っている。与那国のトゥング・ダと呼ばれる田には、人頭税軽減の為の人減らしのため、島の男子をこの田に突然召集し、時間内に来れなかったものを殺したという悲惨な言い伝えがある。また同じく与那国の部良という集落のはずれにあるクラブバリと呼ばれる場所では、妊婦を集め、その大きな岩の割れ目の上を飛ばせ、そして、転落死や流産によって人減らしをしたという。土地の開墾、納税率の向上をはかって強制移住なども行われた。それによって恋人と引き離される事になった女性の話が、「野底マーペー」という伝承として今も語られている。当時の拷問器具もいくつか残っており、税が収められなかった場合、罰として拷問される事もあったようだ。『人頭税廃止百年記念誌 あさばな』には、以下のような記述があった。

罪の軽重によって罰、拷問も違っていただろうが、百姓を恐怖に陥れて統制し、生産性をあげようとしたことだろう。『富川親方八重山諸島公事帳』に「役人は大切な百姓を授けられている。村のために気を付け、百姓の生活が安定するように精勤すること」とある。

そして「毎日、卯の刻までに百姓を一人残さず作場へ追い出すこと。遅れた者は科鞭五ツに処する」とある。竹富島種子取祭の狂言「組頭」の場面が思い浮かぶ。要するに、百姓は税を生むための道具としか見ていなかった、と言えるだろう(上勢頭 2003:165)。

「大切な百姓」という意味合いをどう受けとめるか、それは確かに後述の一文によって大きく左右される所だと思う。歴史を遡れば「年貢に苦しめられる民」というのはいつの時代にも存在し、その過酷な支配の下で言葉にできない思いを抱いてきた事と思う。しかし注目して頂きたいのは先述の文献資料、「人頭税廃止百年記念誌」という部分である。百年。文献目録を見ていただければわかる事だが、この文献は 2003 年に発行されたものだ。2003 年の時点で百年。彼の地に過酷な税制が敷かれていたのは、決して遠い昔の話ではない。

### 3-2-2. 「独自性」を命がけで納めなければならなかった時代

このような税制の中、命がけで発展していった文化が、織物・染物の文化なのである。元々は重要な輸出品であった染織物文化には、紅型、緋、紬、花織、芭蕉布など様々な種類が存在し、現在沖縄の郷土品としてその技術が受け継がれている。八重山諸島はそもそも 14 世紀後半頃から、中国を中心に東南アジアの国々、日本、朝鮮国などと貿易を行い、他の国の産物を必要とする国を相手に「中継ぎ貿易」をしていた。紬織りの技術もその頃伝えられたものと考えられている。中継ぎ貿易が後退し、交易が主に中国間において成立するようになった頃、琉球国は、工芸技術を磨いて工芸品を生産する方向へ大きく政策を転換する事になる。この独自の織物文化が、人頭税下で大きな役割を持っていた。さて、発展

していった織物の中に、上布というものがある。宮古地方・八重山地方で発展していった織物だ。税制は島の事情などお構いなしであったと先に述べたが、宮古などの農耕があまり盛んでなかった地域には、米などのかわりとしてこの上布を定められているケースがあった。この背景には、税が課せられる当時までに、この織物技術が貢物として利用できるだけの品質を持っていたという事が考えられる。また、その「布の上納」の根底には、王府から渡される「御絵図(みえず)」という存在があった。これは琉球王府が上納の布の柄を指示した絵図で、各島々の女性にはこの見本通りに織物を作成する事が要求された。布を上納する際には厳重な検査があり、当然その背景には貢納の不履行イコール厳罰という恐怖が存在する。女性は皆、主に地機で布を織り、織った物を大きな箱に入れて検査を受けに蔵元へ赴いた。難易度の高い御絵図を受け取った女性達は、死にもの狂いで反物を織らねばならなかった。このように指示された反物の傾向によって、後の島々の織物としての特色が定められていったのではないかと考えられる。「紬」で有名なのは久米島で、蚕繭から糸を取り出し、よりをかけて丈夫な糸に仕上げたこの絹織物は琉球王府に重宝され、審査も相応に厳しいものであったといわれている。命がけで反物を織れば、当然質は向上する。そしてある島に上質な反物文化が出来あがれば、それを示して他の島の質をも向上させようとする。島の中と島と島の間で切迫しながら発展していった織物文化。これは「貢物として利用できるだけの品質を持っていた」為に、「発展の軸を定められながらも、その独自性を伴ったまま発展させられていった」と言えるのではないだろうか。

### 3-2-3. 命がけで神に祈らなければならなかった時代

これと同様に、人頭税と深く関わる文化として今で言う「祭」というものがある。そもそもこれは最初から「祭」であったわけではなく、大半が儀礼的であったものが変容して行って、その中で「祭」になっていったと考えられる。そうした儀礼に取り締まりがなかったわけでもないだろうに、こうした祭が何故盛んに行われ、今も尚残っているのか、私は疑問を持った。その中で私は、压制下で過酷であった当時、税制の下で鬱屈したやるせない部分から、歌謡や芸能が生まれてきた。「過酷な税に対する不満を解消する為の方向性」を見出そうとしていた。確かにそれも要因としてあっただろう。だが、ある時を境にふと、それは現代に生きる私の概念であって、過去この島々に生きていた人には当てはまらないのではないかと思ひ始めた。石垣島で祖母に、「人頭税下でのこうした祭は、過酷な環境下にあってもどうして消える事がなかったのか」と、尋ねた事があった。返ってきた答えは「どうして?」だった。どうして。どうしてだろう。豊年祭や祈年祭、竹富島の種子取祭などは、その名の通り稲作と深く関係する。これらはそもそも「豊作を願う」儀礼である。豊作でなければ貢納が出来ない。それは直接島に住む人々に、厳罰 いわば死を齎すものでもあった。神様に祈らなければ豊作にならない。つまり、祭も命がけだったのだ。祭を芸能、エンターテイメントとして認識しているところのあった、私の思想に過去と現在の差異があった。踊り、謡う事で日頃の压制下から精神的に解放される面がなかったわけではないだろうが、それよりもむしろ、王府の下で祭を行うという事は、王府に収める為の、ひいては薩摩に貢納する為の税を確保する為に、神に祈り、その切実さから、古くより伝わる儀礼が、この時代廃れる事なく続いていったのだと考えられる。今現在「沖縄」として伝えられている「独自性」の裏には、こうした歴史が関係し、だからこそ現在、その姿を残していられるのではないだろうか。

### 3-2-4. 現代に息づく「独自性」・2

また、現在の種子取祭の維持について、上勢頭芳徳はその費用を「各人への割り当て制」としていると記している。これは各家庭の戸主の男女別と年齢によってランク分けする制度で、それに添った金額を祭の費用にしているのだという。以下は、『人頭税廃止百年記念誌 あさばな』からの引用である。

人頭税の下では五十歳で頭はずれとなったのだが、竹富島では死ぬまで種子取祭の賦課金を負担している。しかしお年よりは時期になると、まだ集めに来ないかと催促する。少しでも負担することが、生きがいになっているのだろう。もちろん、島外から多くの寄付もあつてのことだ。夫役としては男が九十三人、女が六十人必要だが、生産人は男が六十九人、女が六十七人だ。女は賄えるが、男は二十四人不足している。だから、一人で二役も三役もする人もある(上勢頭 2003:118-119)。

税制の中で姿を変えていった儀礼は祭として、現在このように継承されている。

#### 小結

1 では、支配の中で統制される事でより一層一般的なものとなった沖縄の「神女」という名の「独自性」を、3-2 では八重山において、悲惨な状況下で、命がけで生み出していかなければならなかった「独自性」があった事を示した。そしてそのどちらも、現代の「沖縄」に息づいている。そして私に、それを沖縄、八重山の「独自性」、=「魅力」として認識させている

のである。

#### 4. 私にとっての「独自性」と沖縄、そして八重山

歴史の中でどのように沖縄・八重山がその存在を位置付けられてきたのか、その中でどのように「独自性」が生み出されていったのかについては、1、2、3で触れた。確認してきたように、現在の「独自性」には、複雑に絡み合った支配の歴史と沖縄という存在の微妙な位置付けが関係している。そして、「独自性」がどのようなものであるか、どのようなものであったかは、その時代によって、誰を対象とするかによって、大きく変容する事になる。

##### 4-1. 「独自性」について

これまで見てきたように、「独自性」というものは多面的である。国家を支える理由になり、人々を追い詰める要因になり、伝統文化を生み出す根底にもなり、人々に痛みを与える凶器にもなる。では、私にとっての「独自性」とは何だろう。この章では、私の視点から見た、沖縄、そして八重山の「独自性」について考えていきたい。

##### 4-1-1. 何故沖縄の「独自性」は痛いのか

沖縄の歴史の中で生み出されるものを探ろうとしていくと、どうしても暗い部分に直面せざるをえなかった。その中から生み出された明るい部分を、豊かな部分を描き出そうとしているのに、どうしてもできない。どうしてだろうとずっと考えていた。だが、支配の歴史で成り立つのが国であり、支配に次ぐ支配で成り立ってきたのがこの王国であったのだから、そこから生み出された「独自性」は当然「支配」に関係するものであり、切って切り離せるものではないのだ。「沖縄は支配の歴史の中にありながらも独自の文化を花開かせた」のではなく、「支配構造の中で生み出されたのが沖縄という存在であった」、「そして確立していた独自性が政治的な領域で利用されるだけの価値を認められていた為、支配の中に独自性の欠片を有したまま存在し続けていたのではないかと、私は思う。本稿で「独自性」という言葉を敢えて私が連呼したのは、ここに理由がある。「独自性」という考え方自体が「支配」の中で生まれた概念であるという意見を先日頂いた。確かにその通りだ。その背景にあったものについては、議論が重ねられるところだと思う。だが逆に、「独自性」を敢えて押し出す事でそこに生きる人々の「自己意識」が護られたという面もあったのではないかと私は考える。その裏にはやはり「支配」という存在があるのだが、その暗い歴史からもまた、「独自性」が生み出されている。そして今現在、その「独自性」は「文化」として認識されている。「独自性」の根底には、複雑に絡み合った歴史の中の、「沖縄」という存在の位置付けがある。沖縄が異国たる魅力を発揮するのも独立国であったその歴史があればこそだが、この地が今尚完全に異国であったなら、「独特である」との感じ方も、また違っていただろう。日本でありながら日本ではなかったからこそ、私は沖縄に赴く度に不思議な空気を感じるのではないだろうか。

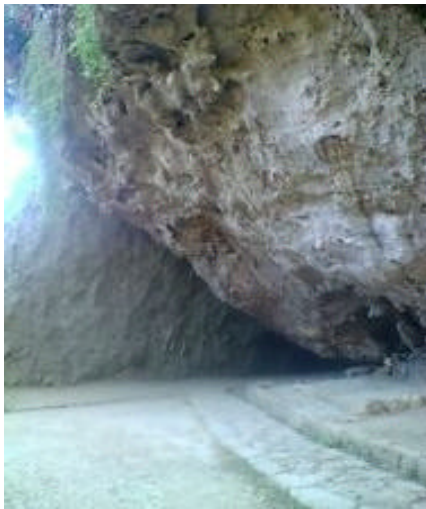
##### 4-1-2. [私]の記憶と「独自性」

では私にとっての「独自性」とは、結局のところ一体何なのだろう。「独自性」はそれぞれの島において柵になり、糧になり、また人々が自らを保つ為に敢えて生み出してきたものでもある。「独自性」は各島々で、大きな意味を持っていた。「独自性」について考える事は、すなわち沖縄、ひいては八重山を考える事にも繋がるのではないだろうか。では沖縄・八重山を「独特」だと私が感じるのはどんな時で、そして私はそれを感じた時、一体何を思ったのだろう。

幼い頃、びっくりして心臓がどきどきする事があった際に、母親が私の胸に手をあてて「マブイ、マブイ」と唱えていた。一体何だろうと思っていたが、これは「びっくりすると魂がどこかへ行ってしまっているので、きちんと戻してあげる」為の呪いなのだそう。この唱え方も様々で、「マブヤー」と言ったり、呪文の合間に相手の名前を呼んであげたりする人もいる。マブイは落としたらすぐに戻さねばならず、どこに落としてきたのかわからなくなった場合には、「ユタ」に魂を戻してもらふ事もあるという。また、うちの台所には塩とお水が置いてある。これは何かと言うと、沖縄では様々なものに神がいるとされており、特に火の神は女性の神様として重要視されている為、常に奉っておかなければならないのだという理由の為だった。沖縄でも多くの場所に火の神が奉られており、グスクなどを見学に行くと、付近には火の神の拝所が点在していた。また、それよりも多く沖縄の各地に点在しているものと言えば、「石敢當」が欠かせない。これは三叉路、T字路に置かれる石板で、表面にはそのまま「石敢當」と彫られている。一体何かと言うとこれは魔よけで、魔物は角を曲がれないという考えの元、T字路などで直進してくる魔物を曲がらせる為に置かれているという。最近ではほとんどの石に文字が彫られているが、どうやら文字が彫られていない石もあるようだ。神が降り立つとされる御嶽も、各地に点在する。ただこれは、入り口に鳥居があったり、何の目印もなく草木の奥に存在していたり、岩と岩の隙間にあたりと、形状がばらばらの為、一般人にはそれと認識されない事も多い。内部は聖地であるとされている為男子は禁制で、神女役し



か入れない事になっている。ただ、公開されている場所もあって、斎場御嶽という、聞得大君が就任式を行ったという御嶽は一般に見学する事が出来る（写真参照）。ここは大庫理、寄満、三庫理といった三つの拜所から成っており、主に切り立った岩壁に向けて参拝するような造りになっている。



一番奥には二枚岩が寄りそうように重なっている空間があり、その奥から東を、久高島を臨む事が出来た。琉球王国時代には、この拜所から太陽を見、聞得大君が中心となる祭祀を行ったと考えられる。そして海を渡った先、久高島のクボウ御嶽という場所では、御嶽は草と木々でしっかりと包まれている。中には入れないが、その森の隣には細い道があり、そこを自転車で走ってみた。背よりも大きい植物群が道の左右にずっと続いていき、しかもその距離が相当に長い。島の端に岩礁があるのだが、その岬まで一直線にその光景が続いている。電信柱もなく、整備された道もなく、ただ草と木と、青い空が広がっているだけの空間だ。見知らぬ鳥が頭上を行き、人の声がしない道に自然の音が木霊する。沖縄の島々は、「独自性」の宝庫である。沖縄に赴くと、こうした不思議な空気を肌で感じる事が何度もある。

また、「八重山そば」という物がある。これは「沖縄そば」とは違う。「宮古そば」とも違う。具や麺、味付けなどが微妙に異なり、それぞれその島独自の特産物を盛り込んで、「独自性」を生み出している。友人達と沖縄本島へ旅行した時、3日連続で沖縄そばを食した。だがどれも口に合わず、私は「こんな味だったっけ」と疑問に思った。石垣島で伯父にそれを話すと、「沖縄そばはまずい、だから八重山そばから様々な知識を得て、沖縄(本島)の企業はどれも改良に力を入れてきた」と言われた。事の真偽は兎も角として、その時私は、「独自性」は様々な形を変え、「商売」、「観光」という部分にも繋がっているのだと再認識した。

身の回りの「独自性」を思い、「独自性」について考えていた最中、私は一冊の本と出会った。宮城文著の『八重山生活誌』である。これは著者が71歳の頃から10年に渡ってまとめあげた大作で、住居、衣、偏食、人の一生、年中儀礼などが書かれた本だ。この本は、このような書き出しで始まっている。

私はかぞえ年八十一才の老女でございます。頭は白く、目はかすみ、皮膚もしぼみました。こんな私が、八、九年前から何かにつかれたように一つのことを思いました。

それは父母や祖父母たちが伝承した南国八重山のとりどりの行事や、私自ら体験した明治・大正・昭和の島の生活状態を書きとどめるといふことでございます。

私たちの先祖は、薩摩藩下や琉球王治下で人頭税などの特殊な税制で酷使されたため極めて貧乏な苦しい生活を続けながらも、日本文化を中心にして中国文化や南方諸島の影響を受けて、独自の文化や生活様式をもっていたようでございます。明治の中頃から新しい日本本土の文化が流れ込み、昭和十年前後は少なくとも表面的には他府県と同じ生活をするようになりました。終戦後は急激にアメリカ文化がなだれ込み、衣食住ともかなり洋風化してしまい、私どもの先祖のくらしがどのようなものであったか全く忘れ去られようとしています。私たちが世を去れば伝えるすべも、伝える人も絶滅するでしょう。それは私たちの父母に対し、郷里に対してしのびないことでございます。これが筆をとった動機でございます(宮城 1995:18)。

このまえがきだけで既に私は胸の奥が熱くなったものだが、この内容というのがまた凄い。私がここまででうすぼんやりと感じていた八重山の「独自性」が、頁を繰る度に形になっていくのだ。さながら百科辞典のようだと思った。

例えば火の神の奉り方についてだが、私は台所に置かれた水と塩しか知らなかった。だがここにはその詳細が書かれていた。昔は台所(トーラ)に置くものも多種多様だったようだ。特にピナカン(火の神)という直径十五センチ、高さ三十センチの三つの石を鼎型に立てて作ったかまどは、主婦の最高の信仰対象になっているのだという。また、炊事と火の神は密接に関わっており、その御前では慎み深く振舞わねばならなかったようだ。火の神の前で泣いたり怒ったり愚痴をこぼしたりしてはならず、乱れ髪で火の神の前に出てもいけない。著書には火の神の前に出る(炊事をする)際の七つもの心得が記載されており、どれだけ火の神が八重山の人々にとって重要であったかが表されている。

石垣島に行った時、不思議な響きの名前(女性の名だ)を耳にした。名前に意味があると思うのは現代の私の感覚なのかもしれないが、「その名前はどういう意味なのか」と祖母に尋ねてみた。返ってきた答えは「意味なんかないさ」だった。昔は男性中心で女性は扱いが軽かった為、名前もそのように決められていたのだという。島のお年より、特に女性の名前



には、日本風の名前とどこか不思議な名前、そして凄く不思議な名前がある。気になって名前について調べてみると、興味深い事がわかった。沖縄一帯には童名というものがあり、王族から平民に至るまで一つまたは二つ以上の名を持っていたのだという。また、八重山の童名は先祖代々伝えられたものであるが、特殊の事情がある場合には特殊な名前がつけられたようだ。例として、戊、己に生まれる子は短命だから男児は『オージ』、女児は『カマドウ』と名づけて長生きを祈願したり、父の死後に生まれた子は、男女とも『カーレー』と名づける、等。ちなみにこの『カーレー』という名前は、「身替り」という意味だという。父の旅行中に生まれた子は「父の帰りを待つ」という意味の名前がつけられた。人々の暮らしの中で、父親という存在がどれほど大きなものだったかが伺える。また、特殊な名前をつける時でもよい名をつけるのはかえって不吉であるという考えのもと、動植物や器物の名をつけ、それに接頭語や接尾語を付けたりもしたという。これらの名前は訛ったり当て字が用いられたりしてへんちくりんな名前に変わってしまうことが多かった、と著者は記述している。成る程、そういう流れの下に、カマドやナベと言った意味合いの、不思議な響きの名が息づいているのだろう。また、男性は童名の他に戸籍上の実名があったのだが、女性は童名のままであった為、童名から所謂「日本風」の名前に改名したりする事もあったそうだ。名前ひとつを取り上げても、八重山は本当に多種多様である。

私の幼い頃の記憶に、祭の記憶がある。とても印象深かったが幼かった為に、人が担いだ板の上で弁慶と牛若丸が対決していた事しか覚えていなかった。これは石垣島で行われる豊年祭のワンシーンの記憶であるのだが、これはツナヌミンコシというようで、その詳細が本の中に描かれていた。

大薙刀を振りあげて立つベンケイは東方から、鎌を二つ握って上下に構えて立つ牛若丸は西方からいずれも戸板に乗せられて大きく頭をふったりして見えを切りながらいかめしい表情で近づき、いよいよ戦うことになるがキラキラ光る本物の鎌でカチンカチンと戦う情景は見物人の心肝をひやりとさせる物凄さである。戦がすむとツナヌミンは素早く東西へ後退して綱引きとなる(宮城 1995:618)。

私の中の原風景が、色鮮やかに甦ってきた瞬間だった。豊年祭は、現在もその姿を残している。旗頭(カシラ)と呼ばれる大きな旗が担ぎ上げられる様は盛観だ。旗頭の文様は地区によって異なるようで、また、その旗に書かれている文字は人々の祈りを表しているという。これはあの祭の日に群集の中で誰かが教えてくれたような気がしたが、この文献を読むまで、私はそんな事を思い出しもしなかった。

深く知るごとに、私はその魅力に圧倒された。今尚その姿を残しているものは少なく、形をかえているものも多々あるが、それもやはり「八重山」なのだ。祖母に幼い頃の話聞いた時、その生活様式の違いにひどく驚いた事がある。祖母の父は厳格で、子供が遊ぶなど言語道断、祖母は小学校から変えると山へ木を取りに行かねばならず、丸太を頭にのせて山の中を行き来していたという。また、井戸に水を取りに行くのも一苦勞で、必要な水を確保する為に何度も遠い場所にある井戸へ足を運んでいたのだそうだ。井戸は「カー」といい、階段をつかって降りていくものを「ウリカー」、つるべをおろして水を汲み取るものを「チリカー」という。海に近い井戸は大半が塩水の出る井戸(スーミズカー)、海から遠い井戸は真水の汲める井戸(アマミズカー)で、祖母の話では井戸は何処にでもあったものではなく数が限られており、山の中腹にある井戸に行くのは大変骨を折る仕事だったという。『八重山生活誌』の中に、このような記述があった。

アマミズカーとスーミズカーの中間に、中水カーがある。真水と塩水の中間の味がするので中水というのである。昔は海に近い家では、真水、中水、塩水の三種の水を使用するので、水がめも三つ並べて、茶水、飯水、使い水(物洗い用)と区別していた。その水がめは露店に置いてあり水を使うのも露天なので、雨降りや暴風の時などの苦勞はもとより、平素でも台所への往復だけでも、時間といい労力といい大変なものであった(宮城 1995:30)。

昔の生活は今とは違う。生活様式も異なるし、人々が生きていく苦勞も到底今の比ではない。よくご高齢の方に「今の子は幸せだ、贅沢だ」と言われ耳の痛い思いをしてはきたが、しかし私はそうした「今の自分とは違う」生き方を聞く時、そうした耳の痛い思いの反面、その「独特さ」を、興味深いと感じてみいる。

#### 4-2. 何故私は「独自性」が好きなのか

思いつくままに記述した、私の視点から見た「独自性」はこのような展開を見せてきた。皆様の視点から御覧になった時、「独特であるなあ」と感じた部分は、どの程度存在していただろうか。そしてそれを感じた時、皆様は心の中で一体何を思ったのだろうか。

私はこれらの「独自性」を認識していく中で、最後にひとつの結論に達した。私は、これらの「独自性」を「好き」だと思っている。「独自性」を何とはなしに眺めていても、「独自性」を深く掘り下げていても、その時私は心の中で、これらの「独

自性」を興味深い、好きだと感じていたのだ。では、何故私はこれらの「独自性」が好きなのか。それを魅力的だと捉えるとき、私の中では、ふたつのパターンが発生していたように思われる。以下にそのパターンを記述しよう。

#### 4-2-1. 「私」に手練り寄せる事を魅力と捉える

何故「好き」なのか。それは逆説的に考えればすぐわかる事で、「今の自分とは違う」から好きなのではないだろうか。「好き」という感情が発生する際には、その接続部に何かしら魅力が発生しているものである。「独特」である事は「個性」である。「個性」とは「独自性」でもある。そしてそれはそのままその自身の魅力に成り得るのではないだろうか。私は自分の日常に、「独特」を引き入れるのが好きだ。専攻語を決めた時も、「ありふれていないものをやりたい」という思いがあったからだ。そんな私だからこそ、こんなにも彼の地に惹かれるのだろう。「自分の生きている場所にはないもの」というのは魅力的である。

しかし恐らく、「沖縄」と「私」の場合は、それだけではないだろう。魅力を感じる根本は同じかもしれないが、専攻語の場合、私にとって最初それはほとんど未知のものであった。だが「沖縄」は違う。物心ついた頃から、私の生活の中にそれと気づかない程度に存在し、また私が生まれた時から、「私」を形成する一部分であった。何もなかった私が、「独自性」に憧れて手を伸ばしたのではない。私の中に、以前は特に意識していなかった日常的、潜在的記憶の「独自性」の種が存在していたからではないだろうか。では、それに私が魅力を感じたのは何故か。そこには、「今まで日常の中にあっただものが、実は周りから見れば独特なものであった」という側面があったように思う。私の周りに在った独自性の中に、仄かに感じていたそれらの魅力が、「本」という媒体を通してその「独特さ」を深め、更に魅力あるものへと変化していったのだ。

#### 4-2-2. 日常が魅力に変化するとき

驚いた時に「マーブイ、マーブイ」と言って魂を呼び戻す所作を、私はずっと自分が生まれ育ってきた場所でも当り前の事なのだと思っていた。友人と偶然同時に同じ事を言った時、肩を三回叩き合うというような、「地元で流行った」おまじないだと思っていた。しかし、そうではなかった。あれは高校の時だったろうか。友人が何かに驚き、私は笑いながら「マーブイ、マーブイ」とその子の背をさすった。するとその友人が、「あ、それこの前映画で見た」と言い出したのだ。学校で見た戦争がテーマの沖縄映画で、子供がそうやってあやされていたのだという。「沖縄のおまじないだね」、その一言で、私は自分の日常にあったものが、周りの人からすれば「独特」であったという事を知ったのだ。この出来事がなければ、私は自分の日常に存在する「沖縄」を意識する事などなかったかもしれない。

これは、今まで日常的に、潜在的に持っていた記憶が、「独自性」というキーワードを持って私の中で「魅力的」な存在へと変化していった、という事ではないだろうか。意識していなかったものを意識する瞬間、それは「それ」が特別であると、自分自身が認識した瞬間に他ならないのではないだろうか。本を読みすすめる中で私の記憶が、どんどん魅力的なものへ変わっていったのも、ここに理由があるように思う。「独自性」とは、それだけで「魅力」になる力も持っているのではないだろうか。何故私がそれらに魅力を感じるのかを考えた時、その結果として「自分とは異なるものへ感じる魅力」と「自分の中にあっただものが独特であった時に感じる魅力」という理由があげられるのではないだろうか。これは私の視点から見た場合の「沖縄・八重山」であったけれど、皆様個人個人の視点で見れば、また別の対象に別の魅力が浮かび上がってくる事だろう。

『八重山生活誌』のまえがきは、このような言葉で締めくくられている。

月世界旅行などと世はあげて前へ前へと進んでいる時代に、現実の生活とかけ離れた昔をふり返って古いことを大事に温めている年よりをお笑いになる方もおられることと思いますが、温故知新ということもありますし、いつの日か何かのお役に立つこともあればと念じています(宮城 1995:19)。

学者でも何でもないひとりの女性がこうして十年かけてまとめあげた本を読んで、「私」というただの学生が、図書館の片隅でその内に秘められた魅力に、とても感動していた。本の中から「八重山」という独特さが溢れ、魅力的なものとして私の中で花開いたからに他ならない。「独特」である事は面白い。やはり「独自性」とは面白い。「沖縄」とは、「八重山」とは、そう、私にとって、とても「面白い」のだ。

## 考察

沖縄を「面白い場所だ」と言うと、「軽軽く面白いなどと言っていい場所ではない」というご意見も出る事と思う。「悲惨な歴史を認知しておきながら、よくそんな事が言えたものだ」と罵られるかもしれない。「独特」であるという考え方は、確かに「差別用語」になったり、様々な摩擦を生み出す一因になる可能性も孕んでいる。しかし、決してそれだけではない

とも、私は思う。これまで見てきたように沖縄は、複雑な利害関係の中、過去様々な位置付けをされてきた。ここに取り上げたのは、ゼロからスタートする為に切り取ったほんの一部の事であり、沖縄の悲劇はまだまだこんなものではない。この後、戦争という大火の中で、あの場所に生きていた人々は言葉にできない痛みを抱える事になる。日本という国に同化しつつある今現在も、「基地」という問題があり、その片鱗が全て消え去ったわけではない。沖縄の位置付けは、今現在も揺らぎ続けている。『ポストコロナリズム』の中で、このような記述があった。

さて、日本人は変貌した沖縄を望まない。日本人が望んでいるのは、永遠に現在の状態が続く沖縄である。日本人は沖縄に生活しているのではなく、君臨している。琉球を武力によって併合して以来今日にいたるまで、基地の強要を含む植民地主義の実践によって日本人が君臨してきた空間こそ沖縄にほかならない。そして沖縄人とは、日本人によって暴力的に植民地主義のターゲットとされたひとびと、すなわち「日本人あつかいされないもの」と定義するよりほかない。沖縄人は本質的に沖縄文化を有するから沖縄人なのではない。日本人の植民地主義こそが沖縄人をつくり続けているのであり、米軍基地の暴力的強要にみられるように、日本人あつかいしないことによって沖縄人を生み出し続けている(野村 2001:156)

戦前戦中戦後、翻弄され続けてきた沖縄の位置付けは未だ定まるところがない。そういう意味では、まだ「沖縄の支配の歴史」は、続いているのだと私は思う。

基地問題は現沖縄の位置付けに深く関わっており、今後様々な形で議論されていくべき問題である。しかし私はここで「沖縄は日本に復帰すべきではなかった」などという主張をしたいのではない。そのような議論は今更無意味であるし、沖縄と日本の間に居る私の存在を否定する事にもなりかねないからだ。だが私は、決して沖縄の支配の歴史を肯定しているわけではない。しかし「沖縄は悲劇の場所だ」と言って本稿を締めくくりたいわけでもない。ただ私は、沖縄の「独自性」が歴史の中でどう扱われ、どのように変化し今に至っているのかを、その凄惨な歴史を経て尚不思議に私を惹きつける沖縄の「独自性」を、ここに提示したいだけなのだ。だからこそ本稿で、「沖縄」「八重山」という存在に、「独自性」を伴わせた。私は「沖縄は支配の歴史の中にありながらも独自の文化を花開かせた」のではなく、「支配構造の中で生み出されたのが沖縄という存在であった」、「そして確立していた独自性が政治的な領域で利用されるだけの価値を認められていた為、支配の中に独自性の欠片を有したまま存在し続けていたのではないか」、「それが沖縄、八重山なのではないか」と考える。沖縄は悲劇の歴史を持っている。だがそこで生きていた人々が生み出した「独自性」は、今も尚色鮮やかに花開いている。「独自性」は、現代の沖縄の魅力として、多様に形を変えつつも、確かに存在しているのではないだろうか。

## 結論

1 では沖縄の歴史を辿る事で、「琉球」、そして「沖縄」が折り重なった支配構造の中に存在していた事を確認した。2 ではその支配の歴史の中で「琉球」「沖縄」という「独自性」が取って位置付けられ、またそのキーワードを取って「使用する」為に、変化を余儀なくされた過程を示し、3 では沖縄のシャーマニズムと八重山地方の織物技術を例として、その支配構造の中から生み出された「独自性」の背景には「支配」体制が密接に関わっていた事、そして現在もその「独自性」が沖縄の「特徴」として受け継がれている事を確認した。また、4 では私の視点から見た沖縄の「独自性」、八重山の「独自性」を提示し、その詳細を描き出した。そして最後に、あの島々は1、2、3 で振り返ったように、様々な痛みの中で「独自性」を変化させ生み出していったが、それは現在、そのまま沖縄の「魅力」として確かに息づいているのではないかという事を表した。

だが、私は決して、「独自性」「イコール」「魅力」という図式を証明したいわけではない。本稿でとりあげたように、「独自性」はとても多面的であり、「独特」であると表現する事は、必ずといってよい程、そこに何らかの「危険性」を孕んでいる。「独自性」という表現は、決して「魅力」になるだけの華々しいものではない。しかし、「独自性」イコール「危険」として視点を定めてしまうのではなく、「独自性」の根本とその歴史、そこから生み出されてきたものを総合して捉えた際に、そこに「魅力」と捉えられるものはないだろうか、そしてそれはこれからも、人々によって多様に変化していく可能性を持つてはいないだろうかという事を、ここに示したいだけなのである。

私は加害者であり、被害者であり、深く関係し、また全くの無関係でもある位置に立っている。本稿ではその「私」の視点から見た「沖縄」、「八重山」を、皆様にも御覧頂いた。皆様の視点で「沖縄」を見つめれば、また異なった「沖縄」が現れてくるように思う。しかし今私の立っているこの場所から彼の島々を見渡した時、その背景には支配の歴史と人々の苦しみが存在する。その痛みは決して忘れてはならないだろう。だが、これだけは言える。その中で人々が作り上げてきた「独

自性」は、確かに魅力あるものとして、今尚確かに存在している。「沖縄」、そして「八重山」。あの場所は、とても面白いのだ。

## 註

- 1 亀甲墓は直接斜面に造られるタイプで、破風型墓はこれに屋根が加わった物。家型は家の形をしている。
- 2 薩摩の管理下に置いてのみ琉球王府の存続を許すという条文。
- 3 グスクとはグシク・スクともよばれ、現在では一般に小高い丘陵上にある城塞をさす。しかし城塞的なものがまったくないグスクも多数あることから、本来意味するものは、聖域であるとする説や、集落跡とする説などがあって定まっていない(高良 1993:45)
- 4 ちなみに、ユタは「民間」で呪い事をする者、「ノロ」は琉球王府によって「任命」された者という意味付けをする事ができる。羽地仕置では王国を支えていた「女性中心祭祀」が初めて規制の対象になっており、またこれ以降、ユタの取り締まりは強化され、「民を惑わすものであるから言う事を聞くな」という勧告が出されるまでになった。
- 5 日本側は清に対し、奄美から沖縄までを日本の領土に組み入れる代わりに宮古・八重山地方を清に譲るとし、且つ日清修好条規に「中国内部での通商」に対する有利な条項を付け加えようとする案を提出した。
- 6 沖縄では魂の事をマブイと呼び、これを落とすと気がなくなったり、熱がさがらなかつたり、どこか具合が悪くなったりすると考えられている。これを戻す為の儀礼方法は一般的に「魂込め(マブイグミ)」という。この方法は様々な説があるが、ユタによってこの儀礼が行われるのは大抵がトイレ(昔は豚小屋)であるといわれている。
- 7 人頭税は主に宮古・八重山地方に課税された悪税だと言われてきたが、近年、人頭税は税率で見ると実は沖縄本島と同じ位の課税であったのではないかという説も浮上しており、税制度の変化過程が議論されている。王府から直接過酷な税が行われたのではなく、間に居る地元役人によって搾取されていたのではという意見もある(新城 2001:111)。

## 文献目録

### 安里進

1994 「沖縄の歴史と文化 海上の道探究」、金架、高宮(編)『東アジア交易圏と琉球の大型グスク・寨官』:45-65、吉川弘文館

### 新川明

2000 『沖縄・統合と反逆』、筑摩書房

### 新城俊昭

2001 『高等学校 琉球・沖縄史』、沖縄歴史教育委員会、東洋企画

### 伊波勝雄

2003 『世替わりにみる沖縄の歴史』、むぎ社

### 伊波普猷

1974 『古琉球』、平凡社

### 小野重朗

1993 『シヌグ・ウンジャミ論 琉球北部圏の文化』二、法政大学沖縄文化研究所篇

### 海洋博覧会記念公団管理財団(編)

1992 『首里城 甦る琉球王国』、海洋博覧会記念公団管理財団

### 上勢頭芳徳

2003 「人頭税廃止百年記念誌あさばな」、八重山人頭税廃止百年記念事業期成会記念部(編)『モノは語りたがっている百年前のことを』:164-177、『種子取祭と人頭税』:115-120、南山舎

### 高良倉吉

1987 『琉球王国の構造』、吉川弘文館

1993 『琉球王国』、岩波新書

### 富山一郎

2000 『暴力の予感 伊波普猷における危機の問題』、岩波書店

### 名嘉真宜勝

1999 『沖縄の人生儀礼と墓』、沖縄文化社

### 野村浩也

2001 「ポストコロナリズム」、姜尚中(編)『沖縄とポストコロナリズム』:156-158、作品社

### 外間守善

2000 『おもしろさうし上・下』、岩波書店

### 本田安次

1991 『沖縄の文化と芸能』、第一書房

### 三木健

1989 『八重山研究の人々』、ニライ社

2003 『八重山研究の歴史』、南山舎

### 宮城文

1995 『八重山生活誌』、沖縄タイムス社

### 吉成直樹

2003 『琉球民俗の底流 - 古歌謡は何を語るか』、古今書院